

「郷に入りては郷のことばに……」

総務部長 武市 正幸

今から十三年前、当会の夏の自然体験キャンプにおいて、ある転換期を迎えた。それまで国内の農山漁村地域をフィールドに自然・生活体験活動を展開してきた完全にドメスティックな当会であったが、自然体験キャンプ高リピーターや山村留学OB OGたちの「次にチャレンジする」ニーズにこたえるべく国際交流プログラムを取り入れたのである。第一回は二〇〇七年にオーストラリアで実施した。第二回以降は東南アジアを中心に実施している。

そのコンセプトは国内で身につけた自然体験や生活体験の経験とスキルを異国の地で発揮することをベースとした、異文化体験と海を越えた友情と相互理解による親善である。これらのコンセプトを体現すべく、毎回毎回現地パートナーとも協議しながらプログラム内容をアップデートしてきた。昨夏実施した「日タイ青少年国際交流プログラム2019」を例にして主

な活動をあげてみる。

- ① タイの現代を知る体験（王宮、寺院、市場、公共交通機関等）
- ② タイの歴史を知る体験（世界遺産アユタヤ遺跡群見学）
- ③ 水牛を使った稲作体験（田起し、代かき、田植え、水牛乗り）
- ④ タイ語を使う体験（自己紹介、日常のあいさつ、買い物）
- ⑤ タイの農業と料理体験
- ⑥ 少数民族と交流
- ⑦ ホームステイと授業参加
- ⑧ 日本文化の紹介と交流（和太鼓、民舞、子どもの遊び）

これらの活動にタイの高校生や大学生（時には中学生も）が、少ない時には三〜五人、多い時には五十人近くが一緒に参加してくれた。

初めの頃は要領がつかめなかったうえに一つひとつの活動の説明に時間がかかり、予定していた活動そのものをこなすので精一杯。コンセプトをコントロール下で体験できたという実感は正直に言ってなかなか湧かなかった。しかし昨年ついにこのプログラムが一つの完成形に達したと感ずることができたのである。何があったのか。それは日々の活動をあらためて見直し



たのである。

これまでは現地パートナーの意向もあり、「せっかくタイにいらっしやっただから……」と多い時には一日に三〜四の大きな活動を入れたりしてきた。実際それでも収まらずに諦めた活動も多々あった。しかしこのプログラムで体现したいことをあらためて見つめ直すと一番重要視しなければならないことは「コミュニケーションの充実」だった。そこでこのコミュニケーション力をつける、つまりタイ語を使えるようにする、タイ語を使う場面を積極的に設けることをベースにプログラム内容を再構築してみた。そのためいつもの活動スケジュール表とは別に、タイ語を積極的に使うための日々の「ミッションリスト」を作り、一語二語から買い物や食事の注文に使えるような簡単なセンテンスを用意し、実践した。

その結果、それは狙い通りタイの人々との見えない距離を縮め、より多くの人とつながることになった。プログラム終盤では参加者だけで臆することなく屋台で昼食や夕食を済ませてくることができるようになったのである。そしてそれはコミュニケーションの充実に留まらなかった。タイに着いて間もない頃は表面的にしか受け止めていなかった歴史や政治、生活文化や社会問題にも関心を寄せるようになったのである。

ここまで書いてふと思いついた。

もうだいぶ前になるが私が秋田に勤務していた時のことである。私は情けないことに全く氣がつかなかったのだが、第一期生の留学生たちが一学期の間ずっと言葉に悩んでいた。方言がわからず地元の子たちとうまく交流できていなかったのである。地元の子は地元の子で自分たちの言葉が伝わらないのではと悩んでいた。一学期も終わる頃、そのことに気づいたのは六年生の担任の先生で、すぐさま互いの悩みを解消し交流できるように取り組んでくださった。その成果は二学期早々に現れた。何と夏休み明けに実家から秋田に戻ってきた留学生たちが一斉に秋田弁を使い始めたのである。地元の子たちと仲良く楽しく学び遊べるようになったのは言うまでもない。私はこの時すでにこんな素晴らしいことを目の当たりにしていたのだ。

そういう意味では遅れに失したが、これはもしかしたら当会の転換期というよりも、野外活動スキルや自然体験活動ばかりを偏重していた私自身の転換期だったのかもしれない。

たけいち・まさゆき.....

総務部長。一九八七年、育てる会入職。北相木学園、八坂学園（ともに長野県）、合川まるとび学園（秋田県）の指導員を経て、一九九七年より東京本部勤務。ほぼデスクワークなので、数少ない担当の国際交流活動と船舶活動でモチベーションのバランスを保つ。今はバイク通勤により増えてしまった体重五キロを減らすべく、ノルディックウォーキングに取り組んでいる（二キロ減達成中！）。息抜きは読書と大型バイクの街乗り。